

家族造形法の深度

(2)

早瀬 一男

はじめに...

家族造形法は家族との面接場面で生まれ、利用されている技法です。

そこで、今回は実際の家族との面接場面における具体的な進め方について紹介します。

なお、以下については、あくまでも一般的(基本的)な進め方です。

実施の要領

彫刻家を選びます。

家族の中の誰か一人に彫刻家としての役割を担ってもらいます。

セラピスト(例)

『今日は新しいことをやってみたいと思います。みなさん、立って下さい(この時、セラピストも立つように)。* *さんは彫刻家の役割をお願いします』

誰を彫刻家を選ぶかは、事前に検討しておくことが大切です(まずは、家族の葛藤の外側にいると思われるメンバーが無難かもしれません)。

彫刻家がメンバー全員を粘土の塊に見立てて、自分のイメージする家族(日頃の様子や風景等)を作ります。

セラピスト(例)

『あなたがイメージしているような家族を作ってみてください』

『家族の印象的な場面(シーン)や風景を作ってみて下さい』

『いつもの家族の状況が分かるよう、普段の生活場面を再現してください』 等

家族メンバーは“粘土の塊”ですので、「勝手に動かない、彫刻家役から指示された通りに動く、しゃべったり笑ったりしない」といったルールを伝えます。

また、彫刻家役もできるだけ言葉を使わないようにして作っていくように伝えます。

彫刻家役は家族を一人ずつ選び、位置・姿勢・表情など、あわてずに、ゆっくり、丁寧に作っていきます(セラピストは彫刻家役をサポートします)。

セラピスト(例)

『視線はどの方向ですか?』

『手はどうですか?』

『この人はどのような表情ですか?』

『あなたが思っているイメージのようになりましたか?』

『これでいいですか?』

『どこか修正するところはありませんか?』

彫刻家自身も家族(彫刻)の中に参加します。

セラピスト(例)

『あなた(彫刻家)自身も、彫刻の中に入ってポーズを作ってください』

改めて、全員が静止します(一分間)。
この間、からだや気持ちに集中します。

セラピスト(例)

『今から一分の間、みなさんは自分の体や心の動きに関心を向けてください。集中してください』
『それでは、スタートします』

静止の時間は一分よりも長めでもよい。
静止している間、セラピストはさまざまな角度から「家族造形」として、作品を鑑賞します。

家族造形を作成するここまでのプロセスは、家族の理解やアセスメント(診断的側面)につながるものとなります。

家族それぞれの気持ちや感じたことを言葉にします(セラピストが質問していきます)。

セラピスト(例)

『**さん、からだの感じはどうですか?』
『どのような気持ちですか?』
『どのような感じが湧いてきますか?』
『どのようにしたいですか?』
『気になる存在はどうですか?』
『どのようなことが気になりますか?』
『どのような位置だったらいいですか?(ありたいですか?)』
『どのような姿勢だったらいいですか?(ありたいですか?)』
『どのような表情だったらいいですか?(ありたいですか?)』
『居心地はどうですか?』
『彫刻家があなた(家族)をこのようにイメージしていたというのは知っていましたか?』

セラピストは、気持ちや感情に関連する言葉や思いを引き出すように心掛けます。

セラピスト(例)

『**さんの感想を聞いて、どのように感じましたか?』

家族メンバーの交流や理解が深まるような質問も工夫します。

セラピストとしては、メンバーが自分の思いを率直にフィードバックするとともに、それぞれの発言やコメントを家族がお互いに確かめ合ったり、理解し合えるように進めていくことを大切にします。

セラピストの感想を伝えることもできます。また、メンバーへの質問といった形で、介入的アプローチができる場合もあります。

フィードバックと交流のプロセスは家族に新たな変化をもたらすといった意味で、家族へのアプローチ(援助・介入的側面)につながっているので、大変重要です。

ここまでのプロセスが一つのセッションです。

バリエーションの紹介

続いて行う場合、次回の面接で行う場合など、臨機応変、工夫次第でいろいろなバリエーションがあります。

彫刻家を代えてみる。

家族お互いのイメージや違いが明らかになったり、違いを話題にして家族内のコミュニケーションが促進できます。

動きをつける。

動きが加わることによって、感じ方が変わる場合や動きのきっかけが明らかになる場合など、家族のパターンがより鮮明になることがあります。

理想的な関係を作る。

「このような家族であつたら...」という造形を作ることによって、家族の目標を共有することができます。

また、目標に向かって、家族それぞれがどのように協力するかといった点について、意見交換、相互交流を深めていくことも可能となります。

誰かのポジションに代わってみる。

役割交代によって、新たな気づきが生まれる機会をつくれます。

家族史を順に作っていく。

家族の歴史を家族とともに振り返ることによって、その時々のお気持ちや感情に触れる(思い起こす)機会となります。

その他

- ・メンバーが足りなければ、セラピストや協力スタッフを加えても構いません。
- ・椅子や座布団などの小道具の利用もOKです。

おわりに

家族相談場面における家族造形法の具体的な一般的な進め方を紹介しました。

アセスメント・理解(診断的側面)とアプローチ(援助・介入的側面)の実際の紹介にもなったことと思います。

現在は相談の第一線からは離れていますので、事例検討の場で家族造形法を使っています。

事例検討での進め方や展開の仕方など、次回から紹介していきます。

【家族援助を目指す人のための研修会 2010】
での一コマ

『三世代家族の食卓風景』

一分間の静止

それぞれの気持ちや思いを確かめているところ



(中央奥に向き合って座っている二人)

祖父役(左)

祖母役(右)

(中央奥の右 立っているのは...)

事例提出者(彫刻家役)
(真ん中の向き合って座っている三人)
(左を向いている)のは
娘役
横に並んでいる(背中が見える)のは...
息子役(左)
母親役(右)
(手前の男性)
父親役